

(エ) 論文要旨

論文要旨
申請者氏名 EMAN MOHYELDIN TAHA SINOUSY シヌーシ イマーシ タハ
申請学位 博士（言語教育学）
主論文題目
非漢字系日本語学習者のための日本漢字の字体・字形分析と学習法
Japanese Kanji Shapes Analysis & Learning Method for Non-Kanji Background Learners
主論文要旨〔 邦文は4,000字以内 外国語は2,000語以内 〕
<p>本論文では、非漢字系日本語学習者にとって必要となる字形の認識力を高めるための、漢字の形態の特徴とその構造の論理的で統一された説明と、普遍的で適切と思われる字体学習方法を提示した。</p> <p>序章では、本研究の出発点であった筆者の問題意識について述べ、本研究の課題と目的、そして本論文の全体構成について述べた。</p> <p>第2章では、字形・字体の学習において、非漢字系日本語学習者の日本漢字の字形認識と字形・字体学習の問題点について論述した。非漢字系日本語学習者に対して、先行研究における共通の指摘は、この字形の認識力を促進する「トレーニング」の必要性であった。そこで、このトレーニングに不可欠となる字形の構造分解について検討することにした。</p> <p>第3章では、これまでの字形分析及び分解方法について考察し、続く第4章では、本研究の字形分析と分解方法を検討した。さらに、漢字の形態を学習者に説明できるように、授業の中で活用できる形態の説明方法でありツールである「形コード」を提案した。</p> <p>第5章から第7章までは、第4章での字形の分解方法と、字形の特徴及び字体の構造を示すコードを用いて、学習者自身が活用できる「KANJI IN 6&amp;4：漢字導入コース・字形認識のための字</p>

体学習」と、字形の視覚的複雑さを測定できる「字形の重さ：字形の複雑性の計算法」、そして漢字の形態を学習する際に活用できる「Practice Strokes：形コードを用いた学習用筆順」の3つの実用化を試みた。

第5章では、活用化その1として、非漢字系日本語学習者を対象にした字形認識のための字体学習法としての「KANJI in 6&4」を示した。これは、「基本線レベル」「基本形レベル」「基本部レベル」「複合部レベル」の4つの形態構造段階からなるコースであるが、そのコースの具体的な内容、その特徴とメリットについて述べるとともに、実践例とこれまでの実績についても論じた。

第6章では、活用化その2として、字形の視覚的複雑性を測定する方法を検討した。これまでに、画数と要素数のみで物理的複雑性が被験者による主観的複雑性が測定されているが、本研究の形コードを活用し、主観的複雑性の諸要因を計量可能な変数に変更し、物理的要因に加えて、新しい視点から見た字形の複雑性である「字形の重さ」の測定が可能な方法を検討した。

最後の第7章では、非理論的な、また例外が多い筆順規則に対して、形コードを用いて理論的な枠組みを再検討した。また、日本語を外国語として学習する非漢字系学習者のための伝統的な規則ではなく、学習作業における「学習用の筆順」のための簡素化したルールについて考察した。

本研究の成果には、以下の4点があげられる。

- 1) 日本漢字（現在の日本の漢字）の形態情報の視覚的な分解方法を提示することができたが、漢字教育に分解の結果を使用することよりも、非漢字系日本語学習者が母語の文字にない「形態」の情報を学ぶツールとして活用し、学習者自身が学習漢字の字形を分解し、効率的な字形の認識力のトレーニングを行うことができ、漢字の形の特徴と構造を深く理解できるようになる。
- 2) 漢字教育の現場で、漢字の形態の特徴と構造を説明できる「形コード」が、教師と学生、学生同士、学生自身の学習ノートにおいても「字形・字体の学習用共通言語」として活用でき、漢字学習の負担の一部分を減らすことができる。
- 3) 字形以外の情報を除いた字形・字体の特徴と構造、視覚的複雑性など、諸々の要因を測定する「字形の重さ」の計算法によって、初めて漢字の字形をみる非漢字系学習者の感覚に近い客観的な字形の複雑さを規定できると考えられ、これによって、より効率的な学習漢字の提出順序や適切な漢字指導の展開に活用できるようになる。
- 4) 漢字を学習するにあたって、簡素化した筆順ルールを活用することによって、授業内や様々な練習をスムーズに行い、筆順と関わる混乱を減らすことができる。

以上である。本研究の今後の課題として、「Kanji in 6&4」の学習法の効果を検証するために、学習者の認識力と漢字学習の成果を比較・検討していくことが挙げられる。次に、授業にも自律学習にも活用できるようにデジタル教材の作成を視野に入りたい。また、本研究で提示した「字形の重さ」については、今回の結果だけで判断するのは不十分と考えられることから、今後は、評価データを増やし、関連する要因についての考察を深めたいと考える。また、その結果を字形・字体学習においてどのように具体的に実用化できるか、という点についても追究して行きたい。